

■地域移行のよさは？

まず、部活動を教員主体から、地域主体にしていくよさ、メリットはなんでしょうか？

報道では、教師の負担軽減、働き方改革に資することが強調されていますが、それだけではありません。いや、さんざん、各地の教育委員会や学校向けに働き方関連の研修やアドバイスをしてきた、わたしから見ると、教師の負担軽減だけを前面に出しても、関係者の理解を得ることは難しいケースもあります。このあたり、文科省のペーパーは認識不足あるいは言葉足らずかもしれません。関係者とは、まずは先生たちで、部活動の地域移行に反対する人もいます（いろんな考え、捉え方はあっていいのですが）。そして、生徒や保護者です。では、何が重要でしょうか。まずは子どもたちを主体、主語にして考えることです。子ども（中学生、高校生がメインとなりますが、一部小学生も関係します）への影響はどういうことなのかも含めて、以下では、子どもへの影響、教職員・学校への影響、地域への影響の3つに分けて整理しています（次の図）。

部活動の地域移行(部活動指導員の配置、民間委託を含む)で期待される効果	
1) 子どもにとっての影響	<ul style="list-style-type: none"> ● 学校ではできなかった活動ができる。活動の選択肢が広がる。 ● その競技や文化活動の専門性の高い指導を受けられる(指導者によるが)。 ● 入退部の自由度が増す(強要されにくい)。 ● さまざまな価値観をもつ人との交流(ナナメの関係構築)のなか、成長できる。
2) 教職員、学校にとっての影響	<ul style="list-style-type: none"> ● 部活動指導の負担が減る。授業準備など本来業務により時間とエネルギーを割けるようになる。 ● 地域との関係性が強まる。部活動以外でも連携しやすくなる。
3) 地域にとっての影響	<ul style="list-style-type: none"> ● 地域のスポーツや文化活動が活性化する。指導者も愛好者も増える。 ● 地域のなかでの連帯、関係性、ソーシャル・キャピタルが向上し、部活動以外でも役立つ(たとえば、防災・防犯)。 ● 地域人材にとって生きがいや健康につながる。 ● 民間企業等にとってはビジネスの活性化につながる。

子どもたちにとっては、部活動（地域主体の活動を”部活動”と呼ぶかどうかは、置いておきますが）の選択肢が増えるという効果が期待できます。たとえば、小規模化した中学校などでは、文化部と言え、吹奏楽部と美術部と科学研究部しかないといった例があります。地域主体でカルタ部、将棋部、茶道部などが展開できれば、より生徒の好きなことや伸ばしたいことで活動できますよね。運動部についても同様です。……………

■文科省はモデルやガイドラインは示すが、具体的にどうするかは地域、学校、生徒次第。

本稿の最後にもう一言、申し添えます。

部活動の今後を具体的にどうするか、決めるのは文科省の権限ではありません。学習指導要領上も、部活動は生徒の自主的、自発的な活動とされていますし、究極的には生徒がどう思い、どう活動するか次第です。これまでも、そしてこれからも、国のほうではガイドラインを示したり、モデル事業を実施していくつか参考となる事例を紹介したりはできるでしょう。しかし、部活動の設置主体と運営主体は、国ではありません。各学校で部活動を今後どうしていくか、また地域で受け皿等をつくっていくのかどうかは、国が決めることではありません。

ぜひ、本稿で解説した、地域移行のよさ、魅力、メリット、あるいは問題、課題などを踏まえて、また文科省の提案なども参照して、多くの学校、地域で部活動をどうしていくか、児童生徒も参画した対話と議論をスタートさせてほしいと思います。

記事を読む中で、こうしたテーマが、学校・保護者・地域、そして子どもたちで議論されるためには、何よりも学校が開かれているということが必要だと改めて感じます。そのためには、発想や視点を変えていかなければいけないのだろうなと思います。

今、明石でスタートしたコミュニティ・スクールが早くこうした課題を議論し、コミュニティとして取り組んでいけるようになってほしいなと考えています。

(文責：北本)